

## 1. Pedagogy と Social Welfare/ ECEC における教育 Pedagogy とは？

フィンランドの Early Childhood Education and Care(以下 ECEC と表記する)<sup>[1]</sup>は、1888 年にフレーベルの思想に影響を受けた幼稚園が設立されたことに端を発し、1924 年までは学校教育の一部に位置づけられた。以降、社会保健省 (Ministry of Social Welfare and Health) の管轄下において、0～6 歳までが対象のパイヴァコティ (päiväkoti: 保育と教育の両面の機能を併せもつ日本のこども園のような施設) は 1973 年の保育法 (Act on Children's Daycare) 施行と共に整備されてきた。この社会状況下においては、女性 (親) の就労促進及び家庭教育を支援するための保育施策がすすめられた (Kinos, 2008)。さらに 1990 年代には社会福祉の考え方がさらに強まったともいわれている (Kinos, 2008)。

2000 年に 6 歳児の就学前教育 (就学前教育施設はエシコウルという) がスタートしたことがフィンランドの ECEC の大きな転回点となる。就学前教育は基礎教育の一部に組み込まれ、これによりパイヴァコティとエシコウルで共に働くことのできる幼稚園教諭の資質 (pedagogical competence) が明示された。この改革により、教育内容の責任は教育文化省が、それを管轄するのは社会保健省という振れた状況をもたらした (Onnismaa & Paananen, 2019) 2003 年には各自治体が ECEC の管轄を社会福祉分野から教育分野へと管轄を移行し始めた (Karila, 2008)。

2010 年以降の ECEC 改革のスピードが目覚ましい。行政移管に加え、法整備、ナショナルカリキュラムの制定が行われ、保護者の就労のための子どもの保育という考え方から、社会の一員として主体的に学ぶ権利を有する子どもの視点にたった保育への転換を確かなものにしていく。具体的な動きとしては、2013 年より国レベルでのパイバコティの管轄が、社会保健省から教育文化省に移行し、ECEC は再び教育システムへ組み込まれることとなった。

2015 年に就学前教育が義務化され、幼児教育法 (Act on Early Childhood Education / Varhaiskasvatuslaki) (580/2015) が施行 (2016 年、2018 年に改定) されたことは、ECEC における教育 (pedagogy) の重要性を強める役割を果たした。幼児教育法 (540/2018) によると、ECEC の定義を、Päivähoito (英語: Daycare) から、Varhaiskasvatus (英語: Early Childhood Education) へ変更したことを強調している。法律の旧称は、Päivähoitolaki であった。Päivähoito から Varhaiskasvatus への変更は、ECEC が子どもの権利であることを象徴し、ECEC は教育 (Pedagogy) に重点を置いた Education, Instruction, Care からなる体系的で目標志向的なものとして位置付けられた<sup>[2]</sup>。

2016 年には就学前教育、2017 年には ECEC におけるナショナル・コア・カリキュラムが施行され (2018 年改訂)、基礎教育 (～15 歳まで) に続く、トランスバーサル・コンピテンスと呼ばれる全てに共通の学びのねらいが明示された (Halinen, Harmanen, & Mattila, 2015; Finnish National Board of Education, 2014; Finnish National Board of Education, 2016)。さらに、何をするかといった活動内容から、学びの領域へと捉えが変わり、幅広いスキルに焦点があてられるようになった。2017 年秋には ECEC のカリキュラムに関する文

書のとりまとめが開始され、学びの考え方、教育 (pedagogy) それ自体が強調されるようになる。2020 年からは、どの年齢の子どもも 1 週間に 20 時間以上の ECEC を受ける権利を有することが保障された (Act on Early Childhood Education, 108/2016)。

ECEC の目的は、親のニーズにこたえる役割を超え、今ここに生きる子どもへの権利保障に向かっていることを確認することができる。

## 2. 現在の ECEC ナショナル・コア・カリキュラム

現在のナショナル・コア・カリキュラムは、幼児教育法 (540/2018) に基づいており、ECEC の目的だけでなく、ECEC を受ける子どもの権利に関する規定も含まれている。ナショナル・コア・カリキュラムの目的は、ECEC の質の向上をもたらし、ECEC の実践の主たる内容をおさえることにある。各自治体や他の ECEC の提供者は、コア・カリキュラムに基づいてローカル・カリキュラムを作成し、法律に明記されている 10 の主要目標<sup>[3]</sup>がどう実践されるのかを記述し、評価することが義務となった。これは、幼児教育従事者の新しい課題となっている (Hujala, Koski, Roos & Vlasov, 2020)。

### ー子どもの参加

現在のカリキュラムは、子どもの参加と子ども中心のアプローチがより強調されている。両者の考え方ともそれまでの実践内にあったものの、十分になされてきたとは言えない実態もあったと指摘され (Puroila, Estola & Syrjälä, 2012)、今回の改定で改めて子どもの参加の重要性が確認されたこととなる。「子どもたちが自分たちに関する問題に参加し、影響を与えることができるよう保証する」と法律に明記された文言は、この理念を表しているといえる。

フィンランドの ECEC の基本的価値観と原則は、子どもたちを平等に扱い、子どもたちの意見 (views) を尊重することにある。それぞれの子どもは、自らの生活に影響を及ぼす権利とスキルを持つ、積極的で有能なアクターと見なされる。子ども主体の教育 (child initiated pedagogy) は、ECEC の最も重要な質の評価基準の一つとなり、子どもの考え方やニーズを考慮に入れることの重要性、子どもの参加・関与の重要性を踏まえて実施される。参加には、子どもたちが自分たちの生活 (人生) や周囲の世界に影響を及ぼす機会についての考えが含まれ、エージェンシーとは、こうした機会を利用して物事の成り行きに影響を与える子どもが生まれながらにもつものと捉えられている (Hujala, Koski, Roos & Vlasov, 2020)。

幼児期の学びにおいては、学力 (academic skills) を重視するのではなく、認知、社会、情動のスキルに焦点を当て、子どもの幼児期の学ぶ過程において、「遊び」が重要な役割を果たすことが強調される。「学ぶために学ぶ」と謳われるように、学びに対する積極的な姿勢が、実際の学習結果よりも重要であると見られている。子どもたちは自然に好奇心を持ち、新しいことを学ぶことに興味を持っていると考えられており、励まされ、支えられることで、学びは自発的に行われると考えられている (Hujala, Koski, Roos & Vlasov, 2020)。

具体的な保育実践については、子どもたちの関心に基づいて、子どもたちの自然な行為の延長線上にあると考えられている。遊び、探求、身体活動、様々な形態のアートによる自己表現 (学びの領域 (Learning Area) と呼ばれる) は、子どもに特有の行為や考え方であることが認められている。そのうえで、子どもにとって自然で意味のある活動は、幸せを高め、参

加の機会を与え、意欲を高めるために、計画時にこうした内容が考慮され、実践されることが望ましいとされている (Hujala, Koski, Roos & Vlasov, 2020; Finnish National Agency for Education, 2018)。

### ー保育におけるリーダーシップ

同時に、カリキュラムにおいては、ECEC のビジョンを明確にし、教育(pedagogy)プロセスを支援し、保育者たちがその専門性を発揮できるよう保育者の教育的リーダーシップ (pedagogical leadership) の役割も強調されている (Hujala, Koski, Roos & Vlasov, 2020)。またフィンランドにおいて、リーダーシップは、役職に就く者のみが発揮するものではなく、全職員が参加するインタラクティブなプロセスと見なされている (Hujala, Koski, Roos & Vlasov, 2020)。子どもに向かう実践をより良いものとするために、それを行う職員の専門性が尊重され、また働く環境が守られる必要性が強調されている。そこには、園文化を築き上げていく意義も述べられている。「教育的リーダーシップは、新しい教育学実践の展開を基礎にした、共有された価値にたどり着くためにスタッフ間の議論の場を生み出します。スタッフは、仕事の指針となる見解について、共有し、相互理解を深めることが重要になります」 (Hujala, Koski, Roos & Vlasov, 2020; Act on Early Childhood Education, 540/2018)。

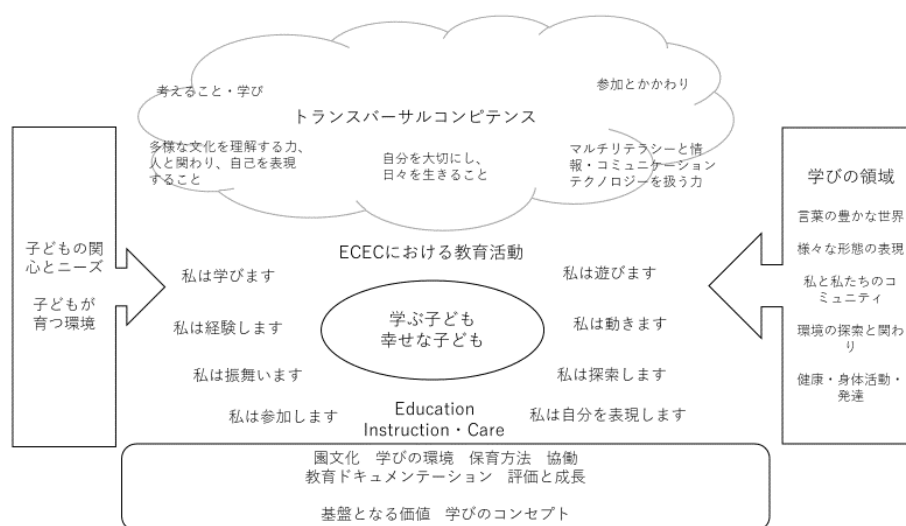


Figure 1. ECECにおける教育活動のフレームワーク  
(Finnish National Agency for Education, 2018 より筆者翻訳・作成)

### ー教育ドキュメンテーション

さらに、教育ドキュメンテーション(Pedagogical documentation)の作成についても触れられている。これは、ECEC の教育活動並びに子どもの生活、発達、興味、思考、学び、ニーズや環境をより良いものにしていくプロセスとして位置づけられている。作成に当たっては子どもや保護者の参加も謳われている。フィンランドの ECEC において以前より用いられている子どもの個々人の個別計画もこの中に位置づけられている。長く蓄積されたドキュメンテーションはまた、保育者の子ども理解や自己評価、教育活動の評価の一部としても重要な要素を持つと位置づけられている (Finnish National Agency for Education, 2018)。

## 3. ECEC 職員の専門性

歴史的背景を受けて、フィンランドのECEC分野では様々な教育的バックグラウンドを持つ職員が働いている。多様な専門性が共存して保育が営まれているといえども聞こえはいいが、肯定的な意見ばかりではない。長い間、保育者の専門性（教育という視点）が薄れ、専門性に関係なく皆が全ての仕事をやる文化が生み出されてきたとも指摘されている（Karila & Kupila, 2010）。現在応用科学系大学（Polytechnic）でソーシャルペダゴジーを修学した者も、幼稚園教諭として職についているが、2023年以降は、大学で幼児教育を学んだ者のみが幼稚園教諭となることが決定された（Act on Early Childhood Education, 540/2018）。ソーシャルペダゴジーの学位をもつものは、家族支援や教育連携を専門とし、幼児教育の養成課程で学び教育の学位をもつものは、子どもの発達や学び、子どもの教育を専門とすることが現時点では示されているのみで、保育現場における多様な専門性をもつ職員間の協働について今後の議論が待たれる。

専門性を保障するという視点からは、現在、幼稚園教諭の勤務時間が3つに分かれて捉えられているのも特徴である。1）子どもと過ごす時間 2）保護者や多職種との協働時間 3）保育をデザイン、評価し、構成する時間（総勤務時間の約13%、5時間が保障される）（Kunnallinen yleinen virka- ja työehtosopimus, 2020-2021）。皆がすべてを担うというあり方から、教育的専門性を活かすために必要となる時間を、勤務時間の中に保証しているのは注目すべき点である。

#### 4. ECECの質の評価

新しいナショナル・コア・カリキュラム策定後、2018年にECECの質を評価するための最初のガイドラインと推奨事項が示された（Vlasov, J. et al., 2019）。それに基づく形で、フィンランドでは初めて全国的な調査が実施され、全国的な質の全体像を把握することが可能となった。自治体および民間のECECの園長、保育者（teachers・carers）、および自治体の家庭保育を提供している保育者を対象とした調査により、ナショナル・コア・カリキュラムで示されている目標が、園や家庭保育でどのように達成されているかを示し、カリキュラムの実施を促進する要因や阻害する要因について、リーダーシップと関係づけられた報告がなされた<sup>[4]</sup>（Repo, L. et al., 2019）。

#### 5. フィンランドのECECの今とこれから

フィンランドにおいては、この10年間、ECECの改革が急進的に行われてきた。これまでの歴史的積み上げの上に、現在ECECにおける教育（Pedagogy）とは何かが改めて問われ始めている。新しいカリキュラムの特質は、ポジティブな学習意欲、学び手のポジティブな自己認識、ポジティブな雰囲気や社会環境といったポジティブ・ペダゴジー（positive pedagogy）にあると明らかにした知見も出てきている（Ranta, 2020; Ranta, Uusiautti & Hyvärinen, 2020）。法律およびナショナル・コア・カリキュラムによる子ども観、学習観の確認のもと、現場では、それらに沿った保育内容の検討、職員の専門性や文化の構築が求められている。こうした動向に加え、今後は、保育者の専門性の分化、養成にわたる改革が検討されている。こうした動きも、今回概観してきた流れの延長にある。今後も様々な声がそれぞれの立場から交わされ、より一層の議論が進むことが予想される。

<sup>[4]</sup>0歳児～5歳児までのECECと6歳児の就学前教育（義務教育）からなる。

施設：ECEC サービスの76%がECEC施設で提供され、これらの施設の73%は公的に組織されている。しかし、民間セクターはここ数年急速に増えている（Hujala, Koski, Roos & Vlasov, 2020）。

保育形態：育児休業後、子どもが生後9ヶ月の時点で、親はECECへの入園を申請するか、自宅で育児を続けるかを定めることができる。市町村は、世帯の所得水準、社会経済的地位、その他の特別な社会的ニーズにかかわらず、各子どもにECECを提供することが求められている。ECEC制度は、包括された幼児教育とケアを提供する。ECECに費やされる1週間の時間は親の労働または修学状況に基づいており、平均は1日約9時間。包括的な制度は、ECEC施設、家庭保育、各種の開かれた保育サービスから構成されている（Hujala, Koski, Roos & Vlasov, 2020）。

職員：教育を受けた3人のスタッフで構成される多職種チームとして、1つの子どもグループと一緒に働くのが一般的となっている。新しい法律によると、多職種のスタッフのうち少なくとも3分の1は、大学で教育学の学士号または修士号を取得していることが求められている。また、3分の1は、応用科学系大学でソーシャルペダゴジーの学士号を取得していることがとされる（学士号取得者は主に幼稚園教諭と呼ばれる）。残りのスタッフは、専門学校の高等教育レベルの卒業証書を持っていることが求められている。2030年までに、すべてのECECセンターのリーダーは、教育学の修士号と専門に関する適切な知識を持っていなければならないとされた（Hujala, Koski, Roos & Vlasov, 2020）。

保育利用率：保育利用の割合は以下の通りである。1歳児 34%、2歳児 63%、3歳児 78%、4歳児 83%、5歳児 86%、6歳児の就学前教育(義務化)（Finnish Institute for Health and Welfare, 2019）

[2] 教育 Pedagogy を構成する Education, Instruction, Care（Finnish National Agency for Education, 2018）

Education: 文化的価値や習慣、規範と関わり、形作り、新たな理解をもたらす。

Instruction: ナショナルカリキュラムで定義されている学びのコンセプトに基づくもの。子どもの学びを促し、自分自身のことを知り、他者や取り巻く世界を知る手助けをする。

Care: 身体的な基本的ニーズに加え、情動面でのケアも求められる。ケアのシチュエーションは、Education であり、Instruction であると考えられている。子どもたちは、相互作用のスキルや、自分自身を大切にできるスキル、時間を管理するスキルなどを学びながら、良い習慣を身につけていく。

[3] Act on Early Childhood Education and Care (540/2018)10 の目標：

- 1) 子どもの年齢と発達に応じて、すべての子どもの全体的な育ち、発達、健康と幸せを促進する。
- 2) 子どもの学びの環境を整え、生涯にわたる学びと教育の平等の実現を促進する。
- 3) 子どもの遊び、身体活動、芸術、文化や伝統に基づいた多様な教育活動を実施し、積極的な学習体験を可能にする。
- 4) 子どものECECの環境が、発達と学びを促進し、健康で安全であることを確認する。
- 5) 子どもを尊重するアプローチを保護し、子どもとECECスタッフの間の人間関係ができるだけ安定して長く続くようにする。
- 6) すべての子どもにECECの機会を平等に提供し、平等とジェンダー平等を促進し、子どもたちが、一般的な文化や伝統と、お互いの言語的、文化的、宗教的、イデオロギー的背景を理解し尊重することができるように支える。
- 7) 子どもが個別にサポートを必要としていることを認め、必要に応じて多職種の協力を得た支援を含め、ECECにおいて適切な支援を提供する。
- 8) 子どもの対人関係と関わりを育て、仲間内で行動する力を促進し、倫理的に責任のある持続可能な行動をとり、他者を尊重し、社会の一員としての役割を果たすよう子どもを導く。
- 9) 児童が自分にかかわる事項に参加し、影響を与えることができるよう保証する。
- 10) 子どものバランスのとれた発達と全体的な幸せのために、子どもと子どもの両親または子どもを保護する他の人と一緒に行動し、子どもを育てるという任務において、両親または子どもを保護する他の人を支援する。

[4] ECECの質の評価報告内容の概要

・ナショナル・コア・カリキュラムに示される目的が、どこでも達成されているわけではないことを示した。多くの園では、ECECの内容に関連した目標はよく達成されていたが、一部の保育所や家庭的保育グループでは達成度が低い結果となった。

・ECECは安心(safe)なものとして体験されており、園の雰囲気は良いと評価されている。子どもの遊びや遊びに基づく教育の権利は、ナショナル・コア・カリキュラムに沿って実践されていた一方で、特に3歳未満の子どもに焦点を当てた教育(pedagogy)については課題が残った。また、アート教育、表現、音楽、身体活動、リテラシー能力、マルチリテラシーを育む活動等の内容に課題が見られる園が多かった。

・ナショナル・コア・カリキュラムの実施は、十分に具体的に策定された地域のECECのカリキュラムに加えて、教育的リーダーシップがあったことで促進されていた。また、職員のための継続した教育が適切に行われたことで、カリキュラムの実施が促進された。一方、ナショナル・コア・カリキュラムの実施を妨げる要因としては、リーダーシップの不足や職員の教育資質(pedagogical competence)の不足、職員不足などが挙げられたことから、質の高い十分で継続される職員の基礎研修、適切な目標を設定した適切な継続された研修の確保、リーダーシップ体制のより詳細な評価などが求められた。

## 引用文献

- Act on Early Childhood Education and Care (2016). Act on Early Childhood Education and Care. Finlex. <https://finlex.fi/fi/laki/alkup/2016/20160108>
- Act on Early Childhood Education and Care (2018). Act on Early Childhood Education and Care. Finlex. <https://www.finlex.fi/en/laki/kaannokset/2018/en20180540.pdf>
- Finnish National Board of Education (2014). Perusopetuksen opetussuunnitelman perusteet. [National Core Curriculum for Basic Education]. Helsinki: Finnish National Board of Education.
- Finnish National Board of Education. (2016). The core curriculum of early childhood education 2016. Helsinki: Finnish National Board of Education.
- Finnish National Agency for Education. (2018). Varhaiskasvatussuunnitelman perusteet 2018 [The core curriculum of early childhood education 2018]. Helsinki: Finnish National Agency for Education.
- Finnish Institute for Health and Welfare. (2019). *Early childhood education and care*. <https://thl.fi/en/web/thlfi-en/statistics/statistics-by-topic/social-services-children-adolescents-and-families/day-care>
- Halinen, I., Harmanen, M. & Mattila, P. (2015). Making Sense of Complexity of the World Today: Why Finland is Introducing Multiliteracy in Teaching and Learning. In V. Bozsik (Ed.) Improving Literacy Skills across Learning. CIDREE Yearbook 2015. Budapest: HIERD, 136-153.
- Hujala, E., A. Koski, P. Roos., and J. Vlasov. (2021). The Success Story of Finnish Early Childhood Education. Vertikal Oy. In print
- Karila, K. (2008) A Finnish viewpoint on professionalism in early childhood education. *European Early Childhood Education Research Journal*, 16(2). 210-223.
- Karila, K. & Kupila, P. (2010). Varhaiskasvatuksen työntekijöiden muotoutuminen eri ammattilaissukupolvien ja ammattiryhmien kohtaamisessa. Tampere: Tampereen yliopisto.
- Kinos, J. (2008): Professionalism – a breeding ground for struggle. The example of the Finnish day - care centre, *European Early Childhood Education Research Journal*, 16:2, 224-241.
- Kunnallinen yleinen virka- ja työehtosopimus (2020-2021). *Liite 5 Varhaiskasvatuksen henkilöstö sekä eräät koulun ammatti- ja peruspalvelutehtävät*. <https://www.kt.fi/sopimukset/kvtes/2020-2021/liite-5-varhaiskasvatuksen-henkilosto-koulun-peruspalvelutehtavat>.
- Puroila, A-M., Estola, E. & Syrjälä, L. (2012). Does Santa exist? Children's everyday narratives as dynamic meeting places in a day care centre context. *Early Child Development and Care*, 182(2). 191-206.
- Onnismaa, E-L., & Paananen, M. (2019). Varhaiskasvatuksen opetussuunnitelmatradition muotoutuminen Suomessa 1970-luvulta 2010-luvulle. Teoksessa: Autio, T., Hakala, L. & Kujala, T. (toim.). Siirtymiä ja ajan merkkejä koulutuksessa: Opetussuunnitelmatutkimuksen näkökulmia. 189-220. Tampere: Tampere University Press.
- Ranta, S. (2020). Positiivinen pedagogiikka suomalaisessa varhaiskasvatuksessa ja esiopetuksessa. [Doctoral dissertation, University of Lapland], Lauda.
- Ranta, S., Uusiautti, S. & Hyvärinen, S. (2020). The implementation of positive pedagogy in Finnish early childhood education and care: a quantitative survey of its practical elements, *Early Child Development and Care*, DOI: 10.1080/03004430.2020.1763979 <https://doi.org/10.1080/03004430.2020.1763979>
- Repo, L., Paananen, M., Eskelinen, M., Mattila, V., Lerkanen, M., Gammelgård, Lillemor., Ulvinen, J., Marjanen, J., Kivistö, Anne., Hjelt, H. (2019). *Varhaiskasvatuksen laatu arjessa – Varhaiskasvatussuunnitelmien toteutuminen päiväkodeissa ja perhepäivähoidossa*. Kansallinen koulutuksen arviointikeskus. [https://karvi.fi/app/uploads/2019/09/KARVI\\_1519.pdf](https://karvi.fi/app/uploads/2019/09/KARVI_1519.pdf)
- Vlasov, J., Salminen, J., Repo, L., Karila, K., Kinnunen, S., Mattila, V., Nukarinen, T., Parrila, S. & Sulonen, H. (2019). *Guidelines and recommendations for evaluating the quality of early childhood education and care*. Finnish Education Evaluation Center. [https://karvi.fi/app/uploads/2019/03/FINEEC\\_Guidelines-and-recommendations\\_web.pdf](https://karvi.fi/app/uploads/2019/03/FINEEC_Guidelines-and-recommendations_web.pdf)